

1

何のために介護ロボット等を導入するのか？

1-1 介護ロボットリーダーの役割

(1) 介護ロボットリーダーとは

介護ロボットマスター育成講習では、「導入した介護ロボット等について、自分の職場に適した活用マニュアルを作成できる知識と技術の習得」を目的とした中級コースの修了者を、「介護ロボットリーダー」と名付けています（表1）。

介護ロボットリーダーは、介護ロボット等の導入に際し、利用しやすい環境づくりや利用者のアセスメント等を踏まえた機器活用マニュアルの作成・見直しを行うなど、「介護ロボット等活用のリーダー」として、職場における介護ロボット等を適切かつ有効に活用するための中心的な役割を担います。

表1. 介護ロボットマスター育成講習 各クラスの全体目標

コース	全体目標
【初級】 介護ロボットオペレーター	職場において自分で介護ロボット等を使用するのに必要な知識等を習得する
【中級】 介護ロボットリーダー	導入した介護ロボット等について、自分の職場に適した活用マニュアルを作成できる知識と技術を習得する
【上級】 介護ロボットマネージャー	介護ロボット等の導入・活用を促進し、職場全体の作業効率を高めるノウハウを習得する

※令和元年度より、各コースの修了者の呼称を、それぞれ「介護ロボットオペレーター」（初級）、「介護ロボットリーダー」（中級）、「介護ロボットマネージャー」（上級）と決めました。

1-2 介護ロボット等導入の目的

生産年齢人口の減少に伴う社会情勢の変化により、介護現場における人材確保、働きやすい職場づくり、高齢者等の多様な人材の活躍に向けて、介護ロボットやICTといったテクノロジー活用必要性が高まっています。

実際の機器導入に際しては、介護業務の課題に対応する導入目的を明確に設定し、職場内で共有することが重要です。

導入目的の設定を含めた介護ロボット等の導入・活用全般のマネジメントについては、上級コースのカリキュラムの範疇となりますが、現場で導入目的を共有することは大変重要なものであるため、介護ロボットリーダーも理解する必要があります。

ここでは導入目的について、「職員の負担軽減」、「利用者に対する介護の質の向上」、「職場全体の業務効率化」という3つの視点から詳しく見ていきます。

<視点①> 職員の負担軽減

導入目的	期待される効果
身体的負担の軽減 (例：腰痛を軽減したい、見守りによる移動負担を減らしたい)	⇒ 移乗介助機器の導入による腰痛などの予防 ⇒ 見守り支援機器の導入による不要な訪室回数の減少 など
精神的負担の軽減 (例：夜勤帯に職員間の連絡を取りやすくしたい)	⇒ 情報共有機器（インカム）の導入により、施設内のどこにいても連絡が取り合えることによる不安感の軽減 など
時間的負担の軽減 (例：介護記録に要する時間を減らしたい)	⇒ 記録システムの導入により、介助を行いながら、その場で簡単に記録できることによる記録の二度手間防止 など
多様な人材起用の検討 (例：性別や年齢に関わらず誰でも移乗介助を行えるようにしたい)	⇒ 移乗介助機器の導入により、力の弱い女性や高齢の職員でも移乗介助ができる可能性がある など

上記の導入目的が達成されることで、期待される効果に加えて、副次的な効果を得られることがあります。例えば、「移乗介助機器の導入により高齢の職員でも移乗介助ができるようになり、他の職員の移乗の負担を軽減することにつながった」や「インカムの導入により精神的な負担が軽減した結果、職員がこれまで以上に心にゆとりを持てるようになり、職場の雰囲気明るくなった」などです。さらに、これらの効果が、利用者に対する介護の質や業務全体の効率化等に良い影響を及ぼすことも考えられます。

<視点②>利用者に対する介護の質の向上

導入目的	期待される効果
より安心・安全な生活の実現 (例：睡眠を妨げないようにしたい、転倒などの事故を減らしたい、移乗介助時のケガのリスクを減らしたい)	⇒ 見守り支援機器や生体センサーの導入による安眠の確保および転倒につながる行動の早期発見・早期対応 ⇒ 移乗介助機器の導入による移乗介助時に発生する擦過傷の防止 など
自立支援・QOLの向上 (例：自分でできることを増やしたい、入居者とのコミュニケーションの時間を増やしたい)	⇒ 移動支援機器の導入による排せつの自立の維持およびプライバシー保護
均質なサービスの提供 (例：移乗介助時に利用者にかかる負担を減らしたい)	⇒ 移乗介助機器の導入により誰が行っても同じ時間と手順で介助できるようになることによるサービスの均質化の実現 など

計画的かつ適切に介護ロボット等を活用することで、利用者の生活における安心・安全の確保や利用者のADLの維持・向上、ひいてはQOLの向上も期待できます。また、介護ロボット等が人が行う介助の一部を担うことにより、経験年数や性別、年齢に関わらず誰が行っても一定レベルのサービスを提供できるようになります。

<視点③>職場全体の業務効率化

導入目的	期待される効果
職員にとって働きやすい職場環境の実現	⇒ 離職の防止、事故防止、職場内雰囲気改善 など
利用者にとって生活しやすい環境の実現	⇒ 利用者満足度向上 など
業務の標準化・効率化の実現	⇒ サービスの質の向上、生産性の向上、業務省力化、人材活用の促進 など

介護人材の不足が見込まれる中、介護施設等で働く職員の身心の負担を減らしつつ、これまでの介護の質を維持・向上させるという課題に対応していくためには、職場全体で業務改善に取り組んでいく必要があります。

既存業務の「ムリ・ムダ・ムラ」を省くことにより、生産性の向上につながり、業務の標準化により、サービスの質が安定することが期待できます。また、それを実現する上では、職員にとって働きやすい職場環境や利用者が生活しやすい環境を実現することが大変重要な要素となります。

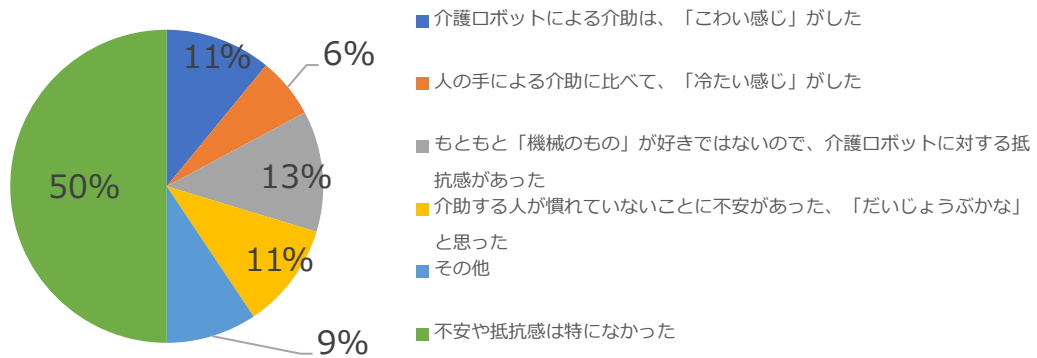
1-3 利用者の視点に立った介護ロボット等の活用

(1) 介護ロボット等を使った介助を受けている利用者の声

北九州市内の介護施設で、実際に介護ロボット等を使った介助を受けている利用者に対し令和元年8月に実施した、「介護ロボット等導入後の変化に関するアンケート調査」の中で、「介護ロボット等を使い始めたころ、不安や抵抗感がありましたか」という問いに対し、約40%の利用者が「何らかの不安や抵抗感があった」と回答(図1)したものの、実際に使用を開始した後について「介護ロボット等を使った介助に満足していますか」との問いに対しては、30%以上の利用者が「満足」と答え、「不満」と答えたのは約3%でした(図2)。

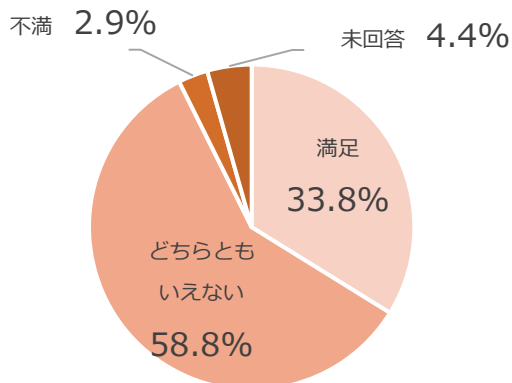
【図1】

Q. あなた(利用者様)は、介護ロボット等を使い始めたころ、不安や抵抗感などがありましたか



【図2】

Q. 介護ロボット等を使った介助に満足していらっしゃいますか



※アンケートへの回答については、本人から聞き取りが困難な場合は、日頃のケアを担当している介護職員等が判断して回答したものを含みます。

(2) 利用者満足度を向上するために

前頁のアンケート調査では、機器を使う前に、機器に対してネガティブなイメージを持つ利用者が比較的多い反面、実際に機器を使った後に不満を抱く利用者はほとんどいなかったことが伺えます。そうした結果から、利用者のケアに対する満足度向上のためにも、機器を使用することについてのメリットやリスク、適合性などについて、事前に利用者やご家族に対して十分説明し理解を得るとともに、実際のケアの中で介護ロボット等を適切に活用することが求められるといえます。

1-4 介護ロボット等を導入するだけでは解決しない

(1) 介護ロボット等を効果的に活用するために

「介護ロボット等ありき」で、単に機器を導入するだけでは、本来得られるはずの導入効果を得られないばかりか、いつしか倉庫に眠ってしまった・・・ということにもなりかねません。そうした残念な結果を招くことなく、導入した機器を効果的に活用するためには、「介護業務の標準化」と「機器活用マニュアルに沿った運用」が重要な鍵となります。

①介護業務の標準化

質の高い介護サービスの提供には、利用者のニーズを、関係する職員全員で共有し、利用者の安全に十分配慮しながら、状況に応じた適切な介助や支援を誰もが同じように行えるようにする業務の標準化が重要であり、それを継続することで利用者の満足度を高めることにつながります。

しかしながら、例えば移乗の際の介助方法一つを取っても、施設ごと、職員ごとで違っているのが現状です。標準化された方法で業務を行うことはプラスの面はあってもマイナスになることはないため、介護業務の標準化は積極的に実施することが望まれます。

■介護業務の標準化の意義

介護サービスの質を向上させるためには、介助者一人ひとりの日々の研鑽が必要なのはもちろんのこと、その際の視点として「どのような方法で介助を行えば介助者、利用者の負担が少なくなるか」ということを意識することが重要です。

また、どの介助者であっても、提供するサービス（介助方法）にバラツキがないことが、利用者にとって質の高いサービスといえるため、標準化された適切な介護業務をマニュアル化し、介助者全員で実践することが、業務を効率的に行えるだけでなく、誰が介助を行っても一定のサービスの質が担保されることとなり、施設全体のサービスの質の底上げにつながるといえます。

■介護業務の標準化により見込まれる効果

介護業務を標準化することによって、サービスの質が向上することは前述のとおりですが、具体的に以下のような効果が見込まれます。

- ・介助者ごとの介護業務のバラツキが少なくなる。
- ・現状で最適かつ的確な「最良の方法」として介助者同士で情報共有できる。
- ・新入社員の教育訓練として活用できる。
- ・定期的な見直しによりノウハウの蓄積が可能となる。
- ・利用者の状況に応じた介助の提供方法の変更が容易になる。

■介護業務の標準化の実践に向けて

皆さんが普段行っている介護業務については、これまでに受けてきた教育や先輩職員からの指導、現場における実務経験などをもとにして確立されたものと思われま

す。そのことは当然尊重されるべきではあるものの、現在行っている介護業務について、人によってバラつきが出ている業務がないか、効率の悪い業務がないか、品質を安定的に保持できていない業務がないか、などを確認することは決して無駄なことではありません。

本テキストでは、P8から、「見守り」における業務の標準化について学んでいきます。

②機器活用マニュアルに沿った運用

介護ロボット等には、メーカーの取扱説明書があり、それに従って操作を行えば、ロボットは正しく作動します。しかし、その適応を誤ると、利用者のQOLや介護の質の向上に結び付かない可能性があります。

そのため、介護ロボット等の導入目的、対象利用者、機器の使用環境、効果的な活用方法などを定めた「機器活用マニュアル」を作成し、適切に運用していくことが重要となります。機器活用マニュアルの作成方法については、P18から解説していきます。